

たぐみ

Craftsmanship

特集 世界の民藝—併催 海外のガラス絵と民画— 第17号

秋田の手仕事と 種苗交換会のこと

いま秋田県立博物館で開かれている秋田の手しごと展(四月十日迄)の初日のイベントに参加した。秋田手仕事文化研究会の企画で、ピアノ演奏や講演、ギャラリートークなどもあって、地域の生活文化の歴史を身近に感じさせ、共感をよんだ会であった。

この企画展は博物館収蔵による近世から現代までの民藝品の展覧だが、秋田の手仕事が地元で生かされ、山村の仕事と生活に密着した風土性豊かなものであることをよく示していた。

ここでひとつ紹介したいのは「秋田県種苗交換会」のことである。この交換会は明治十一年の第一回から平成十五年の二六回(横手会場)まで戦時中でも一度も欠かさずに続けられてきた、農村の一大博覧会であった。

県の主な市や町の持ち回りで行われたこの会は、その名の通り稲作をはじめとする農作物の種苗の品種改良と交

換を目的とし、併せて肥料や鍬、鎌などの刃物、箒や箕、籠、蓑笠など副業の手仕事の品々も出品販売された。

柳宗悦もこの交換会には注意を払い、昭和十七年十一月、盛岡、角館を訪問の帰途、河井寛次郎、濱田庄司ら六名の民藝協会同人と共に湯沢の会場を訪れている。「湯沢は十五日から農民祭があつて大変な雑踏だった。ことし六十五年目かの種苗交換会で、その歴史も古く、意義も深い。私はこの農民祭をみて、東北の豊かな富に驚嘆した」と同人の記録にある。

秋田の手仕事が今なお曲りなりにも健全なのは、このような歴史的背景によることを忘れてはならないと思う。

柳は昭和十七年暮から、それまでの十年に及ぶ全国の民藝品調査の記録をもとに「手仕事の日本」の執筆にとりかかる。かつて荒物、下手物とよばれ、柳たちによつて「民藝品」と名付けられた民衆の日用品に「手仕事」というもう一つの名がつけられたのは、このときからであった。(志賀直邦)

世界の民藝

併催 海外のガラス絵と民画

会期 平成十七年三月二十六日(土)～四月二日(土)

三月二十七日(日)は営業いたしません。

会場 銀座たくみ 二階ギャラリー

営業時間 十一時から十九時まで(日曜日・最終日は十七時半まで)



韓国の古陶器、木工品、金工品、雑貨

たくみがはじめて外国民藝品の会を開いたのは一九三八年四月、東京高島屋での「現代朝鮮民藝品展」であった。この会は前年と前々年の二回にわたって柳、河井、浜田の三人が朝鮮の各地を調査し集めた品の発表と即売を兼ねたものであった。柳は雑誌「工藝」八十二号の編集雑録にこう記した。「この調査が可能になったのは、その経済的方面を負われた「高島屋」及「たくみ」の援助による。旅で集め得た品物は皆今回「たくみ」の主催で高島屋で展観されることとなった」。

戦後たくみがお手伝いした会は、三

越での「韓国民藝展」「中国民藝展」「スペイン・メキシコ民藝展」などがあるが、いずれも想い出が深い。

今回の会は横浜の巧藝舎の協力によるもの、楽しい会をと心掛けた。

主な出品品目

韓国 金益寧作白磁作品と工房の食器、古作陶磁器、お膳と古家具、真鍮の器、箕などの編組品、麻布ほかインドネシア 緋布いろいろ、更紗、ガラス絵、編組と古民具
インド ガラス絵と民衆画、更紗や刺繍の布製品、金工の壺や鳥籠、陶人形や木彫玩具、ネパールの布
イラン 古作タイル絵、吹ガラスの器
アフリカ バウレ族の絞り染腰布、ガーナのケンテクロス布、トンボ玉
中南米 エクアドルの皮絵の民画、ペルー・カハマルカのガラス絵と板絵の鏡、グアテマラの木彫動物
ポーランド・ルーマニアのガラスの聖像画、スペインの彩色絵皿など

海外のガラス絵と民画

ガラス絵というのは、板ガラスに裏から描いた絵であつて、ビザンチン帝国の東方正教会に属したルーマニアに発祥し、次第に各国に拡まつたものといわれる。正教会では信仰の伝達手段として昔からイコンといわれる聖像画が多く作られたが、次第に量産も出来るガラス絵のイコンが民衆の間に普及した。修道士、農村の絵師、そして分業による工房生産などおびただしい数が作られ、また絵師たちの移住などに



ガラス絵のイコン (ルーマニア)

よつてヨーロッパ各地に拡がった。

イコンの美と画法の特徴は、ルネッサンス期以降の西欧の宗敎画と異なり、モチーフとその表現方法が決められ、遠近法も用いないために一見、稚拙にみえることである。裏から描くガラス絵はとくに画法に制約を受けるが、そこがまた面白さといえるだろう。

十九世紀に入りガラス絵はアジアや中南米にも伝わり、インド、インドネシア、中国、日本やペルーでは主に民

衆画として作られた。また絵画表現の一つの分野としても愛好者は多い。

民画というのは、専門の絵師によらない民間の絵画だが、ガラス絵と同じく作者の銘がない。インドではヒンドウーの物語が主題だが、民族によつては影絵芝居や土地のお祭りなどが描かれる。いずれも民族性、土地柄が濃く、また表現方法も素朴で、近代絵画とはまた違つた親近感や楽しさがある。

(志賀直邦)

金益寧の白磁について

日本の白磁とは色艶がちがひ、李朝の白磁ともはつきり異なるモダンさがある金益寧さんの器、この金さんの仕事を知つたのは横浜の巧藝舎の小川さんをとおしてであつた。もうかなり前のことである。

小川泰範さんは会うたびに金さんの白磁を吹聴されていたが、たくみでも

年を追つて着実に愛好家がふえていつた。

金さんはニューヨークに留学中に英国のバーナード・リーチの講演を聞いて触発され陶芸の道に入ったという。アメリカ生活の経験からか、個人の創作活動のほかに工房によるプロダクト生産にも力を注ぎ、国際的にも幅広いファンがいるという。

(S)



金益寧の白磁作品と工場の食器



インドネシア・ラオス・フィリピン・ビルマ・韓国の編組品



インド・インドネシア・ポーランドのガラス絵



エクアドルの皮絵・グアテマラの木彫動物・ペルーの板絵鏡など

糸の話 布の話(下)

吉本 力

「木綿は、しわになりやすい」と思
い込んでいる人がありますが、これは
糊のきいた布の話であって、糊が完全
に落ちてしまえば、本来の木綿の
糸の弾力がありますから、そんなにし
わにはなりません。

私共は、機械織りの布を扱っていま
すが、機械織りの布は糊を完全に落
してしまつと、「思いのほか薄い布と
あつた」とか「激しく縮んでしまつた」



さらさやの木綿のシャツ

と、失望することがありますので、そ
の弱点を取り除くことに心と体をくだ
いていきます。糊抜きをし、収縮させま
すと、ふんわりと柔らかく、これ以上
縮むこともなく、「手織り」に一步近づ
いた布となります。

そのため、手織りの仕事をしている
方から「単純な縞や格子なら吉本さん
のような仕事を見ると、私たちが、わ
ざわざ手織りで織る意義はどこにある
のかしら」と言つて頂いたことがあり
ます。

手織りならこそ藍染め以外に刈安、
やまもも、すおう、弁柄など様々の天
然染料を使つての織物や、複雑な織り
模様もできますので、藍染めの濃淡だ
けで作る模様よりはるかに多くの模様
が織られるので、楽しい世界です。し

かし色系は魔物です。化学染料を使う
と安くて楽に様々な色に染まりますの
で、その誘惑に負けると、思わぬ落と
し穴にはまります。

天然染料では、どのような色の組み
合わせでも配色に破綻をきたすことは
ありませんが、化学染料では配色を問
違えると、汚い模様になることがあり
ます。また洗濯や日光によつて、色が
汚く変つてしまうものがあります。そ
うなりますと、元の配色はよかつたの
に、見るに耐えないものになつてしま
うことがあります。

藍染めといつても様々です。

天然藍一〇〇%で染めた藍染めの色
は格別です。しかし、これは紺屋さん
の規模からいつて量的な制約がありま
す。それに染め賃として一反分七千円
から一万円位を払わねばなりませんか
ら、糸代、織り賃を加え、卸、小売り
と流通機構に乗ると、一反の値段はど
んなに安くても五万円位のものになる
でしょう。

機械織りでは、もつと安い藍染めで大量に染める染め場が必要ですが、それは天然藍にインディゴ・ピュアを多く入れ過ぎることが多く、色落ちの原因となります。そこで、私共はせつせと色落しとの洗濯をして、天然藍だけで染めた藍染めに近づけるように努力

している訳です。その結果、シャツを着ても、他の衣類に色移りする心配もなく、安心して使っていただけの品として喜んで頂いています。木綿の本当の性質をよく知って、木綿と仲良くつきあつて頂きたく思います。
(さらさや主宰・大阪市)

展示会予告

塚田広幸作陶展

会期 四月二十三日(土)～二十八日(木)

日曜日と最終日は五時半まで

会場 たくみ二階サロン

塚田さんはやや年とってから私の許にきた。以前にも多少の経験はあつたが一から勉強し直した。その性格上決してあせらず、一步一步確実に腕をみがいていった。今や何でもこなせる程上達したが、制作の主眼は食器を中心とした生活用具で決して華やかな道ではないが、その志を全うして欲しい。

島岡達三

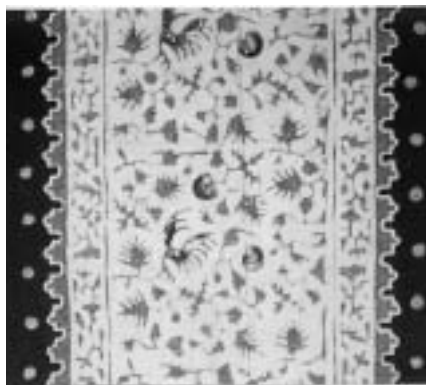


写真A スンバ島のイカット

たくみ歳時記

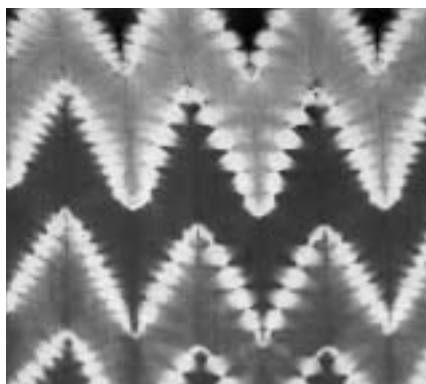
インドネシアの染織

インドネシアは十三世紀、日本の元寇のしばらくあと、同じく元のフビライの大軍の侵攻を受けながらついにそれを防ぎ切った誇り高い王国でした。数百もの島々によって成り立ち、先史時代からすぐれた青銅文化をもち、中国やインドの文明の影響を受けながら古代から特色ある民族文化の花を咲



写真B スマトラ島のパティック

かせました。
インドネシアの主な地域、ジャワやスマトラがマラッカ海峡など海のシルクロードといわれる要衝に位置したため、王朝にも栄枯盛衰がありました。それだけに東西文化の融合と、多島による多彩さが特徴です。それはとくに染織文化に顕著にみられます。とりわけイカットとよばれる緋布は儀礼用とふだん使いの腰布などがあり、地域や島によって模様が異なり魅力が尽きません。ジャワ更紗で知られるローケ



写真C バリ島の絞り染布

ツ染のパティックも、多色の絞り染布も南国ならではの美しさです。
写真Aは、スンバ島の代表的な緋の一つ、王冠と盾、向き合った馬などの模様は、オランダ統治時代に盛んに作られたもの、支配階級の儀礼用です。
Bは、スマトラ島パレンバンのもので、スレンダンといわれるパティックの肩掛けです。
Cは、バリ島の絞り染の肩掛けです。布は絹地で中国産とみられます。製作年代はいずれも二十世紀前半です。

あとがき

昨年暮れに沖縄を訪れたさい、壺屋のある店で中国からの留学生だという若い女性と話をした。福建省の田舎から来たというその学生の言うのには、沖縄と福建省はまるで同じだという。

街も田舎もそっくりだし、食べ物も妙め物が多くて似ているし、ただ夏は沖縄のほうが少し暑いかな、といった。江戸時代、清国への朝貢船の寄港地が福州港であったことを考えると、両者の相似もよく理解できる。

それにしても国や民族の文化や価値観の相異ばかりが取り沙汰されることに、むしろ人々の生活の共通性や相互依存性をもっと知るべきだろう。それに生活文化において日本が中国や朝鮮、東南アジアの恩恵を強く受けてきたことを忘れてはならない。(S)

発行 株式会社たくみ

東京都中央区銀座八一四一二
発行責任者 志賀直邦

電話 〇三―三五七―二〇一七
FAX 〇三―三五七―二一六九
振替 〇〇―一〇―二―三五六五九
定価 六〇円(税込)